

京芸通信

Kyo-gei Tsushin

Vol. 018

京都市立芸術大学
広報誌
2015年1月

境谷小学校の廊下や教室の壁をキャンパスに、レジデンス作家が制作した作品 (2014年2月)

特集

地域の皆様と連携して活動を展開

地域の中の京都芸大

▷ 教員の活動

京都芸大が誇るピアノ専攻教授陣5人によるリレーコンサート

ベートーヴェン ピアノ協奏曲 全曲演奏会

▷ 修了生インタビュー

美術研究科修士課程彫刻専攻修了生

谷中 佑輔

▷ 在学生インタビュー

音楽研究科修士課程器楽専攻 (ピアノ)

山下 諒

▷ 教員インタビュー

美術学部 構想設計専攻 教授

高橋 悟

▷ 京芸で、日本の伝統音楽に触れる

日本伝統音楽研究センター 准教授

竹内有一

▷ リレーコラム

芸術資源研究センター 准教授

加治屋 健司

▷ 芸術資源研究センターより

▷ 2014年京芸の出来事

京都市が本学の崇仁地域への移転整備方針の決定を発表/次期理事長予定者に鷺田清一氏を選出/韓国芸術総合学校との交流協定を締結 ほか

京都市立芸術大学

Kyoto City University of Arts — founded in 1880 —

地域の中の京都芸大



Case-1

小学校における 幸福なレジデンス

京都芸大は、生活の中に文化芸術を浸透させ、京都の魅力を一層高めるため、教育研究活動の成果を発信するとともに、地域の皆様や他機関と連携し、様々な活動を展開しています。今回の特集では、地域連携の取組の一部をご紹介します。

京

都芸大では、大学と同じ洛西地域にある境谷小学校と連携し、小学校の空き教室を子どもたちが自由に訪れるアトリエとして活用し、学生等が滞在制作を行う「境谷小レジデンス」や、美術学部独自の授業「テーマ演習」で、ワークショップや展覧会を開催し、子どもたちと芸術を通じた交流を行っています。「境谷小レジデンス」に携わっている、横田学（美術学部教授）、門田真澄（境谷小学校校長）、中村潤（レジデンス作家）の3氏に、これまでを振り返っていただきました。

中村 子どもたちは、最初は「図工の延長みたいなことを真剣にしている大人がいる。」って思ったでしょうね。取組に参加して2年経ち、来たときには子どもたちが、「あ、今日は来てるね。」って部屋に言いに来てくれる関係になれたのはうれしかったです。
門田 子どもたちにとって



学生が教える水墨画の授業の様子

も、何の壁もなく自然に作家さんとしやべったりして、日常の中に普通に存在している感じだったんだと思います。
横田 学生にとっては、外に出て制作するということは社会とのつながりができるので、成長するうえでも大切なことだと思います。
中村 ここに来ると、みんな「何してるの。」と聞いてくるので、伝えるために言葉を探したりして、毎日訓練しているようなところもあります。何かをしてあげるとい気持

ちがなくても、子どもたちは見ているだけで楽しいと言ってくれます。

門田 子どもたちも作家さんと話したり、身近に見たりすることで情操教育にも役立っていると思います。人間の心が育つためには、芸術に触れることはとても大切だと思います。

横田 地域連携という点、大学にノルマが課せられるようなイメージがありますが、私は、ここに來させてもらって子どもたちや先生方と話したり、いろんな取組をすることは日常的なことで、地域とのつながりというのは、そんな自然なものであるべきではないかと思えます。むしろ、こちらがいただくものの方が大きいですね。

中村 そうですね。場所を貸してもらっているし、いつでも来ていいって言うってくださるので私たちにとっては安心感もあり、期限が限られていないのでいろんなことができ

て面白い。

門田 小学校は地域の方が集うことが多いですね。小学校と大学の連携に地域の皆さんも一緒に参加できたら楽しそうですね。

横田 このレジデンスを始めた年から、境谷小学校の作品展に学生の作品も展示しようということになって、そうしたら、地域の方も見に来られて、「私たちも展示したい。」と。その翌年から、地域の方も展示するようになったんです。

門田 地域の方に作品を出していたくても継続していくことが大事ですよ。そこが、地域とのつながりが本物になっていくんですね。
横田 この取組も4年目に



学生と小学生と一緒に制作するワークショップの様子



レジデンス作家がアトリエとして利用している教室



学生が制作し、小学生が絵を描いて完成したカヌーの進水式の様子(2014年8月)



制作の様子

なって、そろそろ次のステップを考えていきたいなど思っているんです。今、こういうスペースがあつて、いろんな成果がある中で、学部を卒業してすぐの学生たちが、社会の中で次のステップをどんなふうに進んでいこうかというのを考えていこうかと思っています。

門田 ここに来る子どもは、近くの教室の子どもや、図画工作に興味を持っている子どもが多いです。小学校としては、今後、作家さんに子ども全員と関わっていただけようかな取組ができればいいなと思っています。

「西京魅力探訪」

Base-2



学生が制作する新聞「西京魅力探訪」

京 都市西京区の魅力を紹介する新聞「西京魅力探訪」は、ビジュアル・デザイン専攻4回生が授業の一環として制作しているものです。学生が5〜6名のチームを編成し、取材から編集デザインまでを行います。新聞は、西京区の各小学校区・地域ごとに作成し、同じ内容で、壁新聞とタブロイド判の2パターンを作成しています。壁新聞は西京区役所等で展示され、タブロイド判はその学区の全戸に配布されています。この取組は、地域コミュニティの活性化を目的に、本学と西京区民ふれあい事業実行委員会、西京区役所による共同事業として、平成22年度から26年度までの5年間に亘って実施しています。授業を担当したビジュアル・デザイン専攻の辰巳明久教授にお話を伺いました。



辰巳明久 教授

——この取組を始めたいきっかけは。

平成21年頃、当時の西京区役所まちづくり推進課の係長から「区役所と京都芸大と地域が連携して、地域の魅力を発信する取組はできないか。」という相談を受けたのがきっかけで、この発想が生まれました。

——壁新聞はどのようにして作られるのですか。

まず、学生と教員が自治会の皆様と顔合わせをし、地域の歴史等の興味深いお話を聞かせてもらい、地域の概要を知ることから始まります。そこから学生達は、自分達でテーマを決め、1ヶ月〜1ヶ月半の取材期間に、概ね10〜15回程度地域に足を運んで取材し、それを記事にします。テーマや特集する内容については、自治会の皆様が決めるのではなく、学生が自分達で見つけて決めさせていたいくこととしています。それは、学生達の視点を優先した方が、地域では当たり前になっている魅力が再発見できるのではないかと考えているからです。

——授業の環として学生に取組ませる目的は。

——西京魅力探訪は、文字は全て手書きで、人物や風景も写真を用いることなく絵で紹介することとしています。本学のデザイン科は、他大学と異なり、コンピューターではなく自らの手で描くことを



大事にしています。そのデザイン科の最終学年である4回生に、手で描く表現の集大成としてこの課題を与えています。

また、取材はその段取りから全て学生自身が行います。自治会には「地域の皆様が生徒を育ててほしい。」とお願ひしており、学生のコミュニケーション能力を養う目的もあります。

—— 地域貢献に対してはどのような思いがありますか。

西京区は近年、若年層を中心とした区外からの転入が多く、地域のことをあまり御存知ない方が増えてきているようです。そういった新しく来られた方にもっと地域の魅力を知ってもらい、積極的に自治会などの地域の活動に参加してもらいたいという思いが

行政や自治会にあることを知り、その一助になればと思っています。

よく「地域貢献」といわれますが、私は、「大学」が「地域」に貢献するものではなく、大学と地域は本来一体であり、地域の中で一緒に新しい文化を作っていくものだと思います。行政・地域・大学がそれぞれ目的を達成するための時間や労力を削って連携し力を注ぐのではなく、連携することで、それぞれが持つ目的が効率化されるような工夫をすべきであると考えています。

—— 今後の取組について。

5年にわたり西京区全体の魅力を伝えてきましたが、各学区でいうと一度の特集で終わっています。西京区役所のホームページには過去のものも含めて掲載してもらっていますが、時間の経過とともに情報は埋もれていきます。地域をより活性化していくために、こういった取組は恒常的にあるべきで、もっと継続的な取組ができないかと思っています。

最終年となる今年度は、壁新聞が、西京区役所と洛西支所で展示され、タブロイド判が、2月中旬頃にその学区の全戸に配布される予定であるとともに、西京区役所のホームページで過去のものも含めて掲載されておりますので、一般の方にもご覧いただけます。

辰巳教授は、「学生がそこで何を見つけたか。」という視点で見てもらいたい。地域の方に、学生たちが見つけた地域の魅力に面白みを感じてもらえたら。」と語ります。



地域の方・学生のコメント

自分達では当たり前になって意識していなかった地域の魅力について、学生のインタビューに答える中で再認識し、学生の視点が入ることで再発見してもらいました。地域の祭りや、その後の宴会にまで参加してくれる学生もあり、地域に入り込んで深く掘り下げた記事を作ってくれたことに感謝しています。西京区を皮切りに、こういった地域を紹介する取組が京都市の全区に広がり、全区のものを併せて一冊の本になれば面白いなと思っています。

[小石玖三主さん/西京区自治連合会会長]

地域の方への取材の日程調整からお話をお聞きする際に面白いネタを引き出すことなど、全て学生だけで行うため、地域の方にご迷惑をお掛けすることもありましたが、グループで意見を出し合いながら自分達で考えて進めていったことは、企業に就職した場合などにも生きてくる非常に良い経験となりました。

[橋本隆史/美術研究科修士課程1回生]

自分が担当した洛西ニュータウンは、新しく転入してきた若年層も多いため、そういった方に洛西の魅力を知ってもらえるようにということを意識して紙面を作成しました。この課題に取り組んだ時期は、就職活動や個人の制作、別の課題等が重なっており、複数の物事を並行して進めるために必要となる段取りのトレーニングになったと思います。

[細川希樹/美術研究科修士課程1回生]





Case-3

上質なクラシックをもっと身近に

音 楽学部では、市民の皆様にはクラシック音楽に親しんでいただくため、ハイレベルな作品から、小さなお子様や御年配の方にも親しめる作品まで、幅広く、本格的な演奏会を、コンサートホールだけでなく、小学校や地域のお祭りなどでも開催しています。

京都ライオンズクラブ創立60周年記念チャリティコンサート

京都ライオンズクラブと京都芸大は、連携してピアノフェスティバルなどの演奏会を開催しています。

平成26年6月29日、京都コンサートホールにおいて、同クラブが創立60周年を迎えられましたことを記念して、チャリティコンサートを開催しました。

コンサートでは、客員教授であり、京都市交響楽団常任指揮者である広上淳一氏の指揮の下、音楽学部・大学院管弦楽団が、「新世界より」の副題で知られるドヴォルザークの交響曲第9番、ロシアの民話を題材に作曲されたストラヴィンスキーのバレエ組曲

「火の鳥」(1919年版)、京都ライオンズクラブ創立50周年時に雅楽師・東儀秀樹氏が作曲した「京都の韻」など、多様な楽曲を演奏しました。

定期演奏会 大学院オペラ公演

毎年2月に、京都芸大の講堂において、音楽学部・大学院がオペラ公演を行っており



昨年度の大学院オペラ公演の様子



西京区民ふれあいまつり(2014年11月)

ます。舞台上で歌う学生、オーケストラの演奏はもちろん、舞台や衣装など、オペラに必要な準備も学生が行います。平成26年は、イタリアのオペラ作曲家であるドニゼッティ作曲の歌劇「ピア・デ・トロメイ」を上演しました。大学院生を中心とした音楽専攻生の熱演と大学院管弦楽団の演奏により、13世紀のイタリアを舞台にした一途な愛情が生み出す悲劇の物語をお届けし、地元の皆様から音楽関係者まで幅広い層にお楽しみいただきました。

西京区民ふれあいまつり

平成26年11月15日、ホテル京都エミナス、ラクセーナで開催された、西京区の皆様による秋の祭典「西京区民ふれあいまつり」のステージで、

ピアノ専攻の学生が、リスト「愛の夢」と、ベートーヴェンの交響曲第7番第1楽章のピアノ演奏を披露しました。

カザラッカコンサート

毎年9月頃、京都市立桂坂小学校PTAでは、PTAコーラス部や6年生児童、小学校教職員などによる演奏会「カザラッカコンサート」を同小学校で開催されています。

京都芸大から増井信貴教授(指揮専攻)と音楽学部生有志によるオーケストラも参加し、クラシックの名曲を演奏するとともに、アニメ、映画などの曲の演奏を交えた楽器紹介を行い、最後に、小学校6年生とオーケストラが、合唱「ふるさと」などを一緒に演奏しました。



カザラッカコンサート(2014年9月)

カザラッカコンサート参加者のコメント

素晴らしい学生さんばかりで感動しました。子どもたちは普段これほどオーケストラと関わることはあまりありません。カザラッカコンサートは、京都芸大の皆さん、親子連れ、お年寄り、教職員の方々まで、音楽を通して幅広い交流ができていて今後も続けていきたいです。
[桂坂小学校PTA会長/広尾 郷史さん]

カザラッカコンサートでは、小さいお子さんも静かに聴いてくれたし、皆さん笑顔で、反応が良かったので嬉しかったです。小学校と京都芸大は近いので、こういう交流の機会をもっと持っていきたいです。
[管・打楽専攻3回生/陶山美輝さん]

我々にとっては、世界的なコンサートホールでマーラーのシンフォニーを演奏することも、桂坂小学校で小学生と「ふるさと」を一緒に演奏することも同じ価値であり、音楽の心を伝えたいという思いに変わりはありません。音楽は地域社会に貢献していかなければならないし、地域との活動を大事にしていきたいと思います。
[音楽学部長/大嶋義実]

予告 第148回 定期演奏会 大学院オペラ公演

本格的なオペラは一見の価値あり！

日時：平成27年2月21日(土) 17:00 開演
平成27年2月22日(日) 14:00 開演
*開場は開演の1時間前
*上演時間は約3時間

場所：京都市立芸術大学講堂
定員：先着400名[申込不要/全席自由/無料]
問合せ：連携推進課(事業推進担当) 075-334-2204



過去の公演の様子





公開講座「祇園囃子の世界」
京都芸術センターにて。
専任教員が地域の皆さんと共同で取
り組んだ専門的研究の成果をわかり
やすく披露。

Case-A

研究成果を一般の皆様を提供

日本伝統音楽研究センターでは、日本の伝統的な音楽・芸能とその根底にある文化の構造を研究し、その成果を、講座（市民向け公開講座／伝音セミナー／でんおん連続講座）を通じて、一般の皆様提供することにより、地域に貢献しています。ここでは、本センターの講座を何度も御受講いただいている方に、講座の魅力や地域の中における京都芸大の存在などについてお聞きしました。

▽左京区 中山盛男様

講座を受講したきっかけは。

京都市の市民しんぶんに掲載されている講座の紹介を見て受講しました。

講座の魅力は。

講師のわかりやすい解説が魅力的です。浄瑠璃に関する講座を受講したとき、成り立ちから隆盛時代の背景、今日に至るまでの流れがわかりやすく、また、実際の床本（大夫が用いる本）を使われていて臨場感もありました。現役の演奏家二人の実演を間近に鑑賞でき、芸に対する意気込みを感じられたことがよかったです。

大学が一般の方向けに講座を行うことをどう思いますか。

テレビ・ラジオ等のメディアは欧米等の情報で溢れており、邦楽が極端に少なくなっています。そんな中、京都芸大では邦楽を学ぶことができ、また、「和」の発信地である京都芸大としては、邦楽の研究にさらに力を入れるべきではないでしょうか。

京都芸大は地域の中でどんな存在ですか。

先祖が培った「和」の伝統を守り、さらに将来に向けて発信し続ける貴重な存在です。

▽長岡京市 松尾 朔郎様

講座を受講したきっかけは。

中山間部のふるさとで育った60〜70歳ぐらいの方は、幼い頃、村の祭りや青年団が行う文楽、浪曲、時代もの、田舎芝居が唯一の楽しみだった記憶があると思います。私は高齢になり、当時の大衆芸能である人形浄瑠璃の記憶を元に庶民の芸能文化水準の高さを知り、ふるさとを誇る気持ち（いや〜むしる講座で学んだことで湧いてきた気持ち）を抱いたのが伝音セミナーを受講したきっかけです。

講座の魅力は。

先生方の熱心な指導の姿に触れたことです。学生に混じって未知の世界を講座で学べるアカデミックな高揚感、京都芸大の大きな魅力です。

大学が一般の方向けに講座を行うことをどう思いますか。

京都芸大は自宅から近くのところであり、交通費や時間をかけずにキャンパスに行けます。大学のキャンパスで学べることは、遠方に住む友人から羨望の的です。

京都芸大は地域の中でどんな存在ですか。

まさに芸術大学があることは、日常生活においてとても良い雰囲気になります。まちづくりの核にもなると思います。



連続講座「かっぱれの謎を解き、踊る」
声を出す、楽器を弾く、体を動かすとい
った体験型の講座では、市民・学生
講師による共同作業に、ことさら熱が
こもります。

移転に先立ち プレ事業を 実施

Case-5

平成26年1月、門川大作家都市長から、京都芸大を約10年後に京都駅東部の崇仁地域へ移転整備する方針が発表されました。本学と京都市では、移転整備完了までの期間を有効に活用し、地域の方々の連携の下、移転整備プレ事業を実施しています。

この取組の一環として、元崇仁小学校において、美術学部構想設計専攻高橋悟教授が、崇仁地域における地域の歴史や文化を学ぶ授業を行っています。授業の成果は、地域の方もお招きして発表する予定です。

その他、下京区や崇仁地域で行われたお祭り等にも本学学生が参加させていただきま

した。参加させていただきたいだけの取組でも、地域の方々に温かく迎えていただきました。

本学としては、今後とも、芸術を通じた交流を図っていききたいと考えております。



11月9日「平成26年度下京区ふれ愛ひろば」で、音楽学部生・大学院生が、トロンボーン四重奏を披露。また、美術学部では、学部生が似顔絵コーナーを出店するとともに、大学院生がステージのバックパネルの作成に携わらせていただきました。



8月2日 崇仁地域のお祭り「楽市・洛座夏まつり」で美術学部日本画専攻生の似顔絵コーナーを出店



5月11日 崇仁地域のお祭り「楽市・洛座春まつり」において、音楽学部生・大学院生が、開会のファンファーレ及び金管五重奏を披露



アートアワードトーキョー丸の内2014 グランプリ

たになか ゆうすけ
谷中 佑輔

美術研究科
修士課程彫刻専攻 2014 年修了

2012年中国中央美術学院(北京)交換留学, 2014年京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。2014年アートアワードトーキョー丸の内2014 グランプリ, 京都市立芸術大学修了制作奨励賞等受賞。京都市内HAPSスタジオで作品制作中。

—— グランプリ受賞おめでとうございます。受賞作品「山の振動」についてお聞かせください。

「山」というものは、風景としては存在しているのですが、「山」という物体そのものに触れる事はできません。例えば、ペットボトルは、それを見れば、自分の経験と照らして硬さもわかって、適切な力で掴んで持ち上げることが出来ます。けど、「山」は、そういう事ができないんです。そういう「不可能性」みたいなものと、逆に、それに触れられる「可能性」の両方を備えて存在しているものとして作った作品です。

例えば、赤色は、強い前進色で、目に飛び込んでくる色なんですけど、この赤のオブジェは造形的には奥に向かって離れていく形になっています。その「解離性」が最初に言った「山に触れる事ができない不可能性」を表現しており、逆に手前向きに、後退色の青色や緑色のオブジェを配置して、バランスやギャップ、リズムを作っています。

—— これまで素材と身体の関係に焦点を当てた作品を制作されていましたが、それとの関係は。

僕は、対象物を見る事と体感する事の差を作品の重要なテーマとしています。例えば、牛乳瓶の入り口にゆで卵を置いて、牛乳瓶を温めるとゆで卵が瓶の中に入っていく



個展「Galatea」2014年(ギャラリー@KCUA)にて

科学の実験があるじゃないですか。ゆで卵が瓶に入って、ぎゅってなっている時は、机の上に普通に置かれている時に比べて、ゆで卵の具体的な弾力を目で見てイメージできます。これまでは、ギャラリー@KCUAでの展示作品など、そういった感覚を、僕自身と対象物との関わりとして表現していましたが、今回の「山の振動」では、鑑賞者にもそれを広げ、鑑賞者が見て体感するという作品に変えています。

—— 京都芸大で過ごされた時間の中で得たものは。

総合基礎実技や彫刻専攻の授業等の中で、大きな木、石や鉄など物質との関わりが

多くあって、京都芸大で過ごす時間の中で、物質に対する興味をただの興味で終わらせるのではなく、表現に結びつけることができるようになりました。

—— 今後、やりたいことは。

人体の彫刻作品を作りたいと思っています。人体の作品を見て、「この辺の筋肉に力入ってるなあ」と見て、感じるという事は、先ほど言っていた、見て体感することと同じ関係だと思い、試みようとしています。でも、ストレートに体感できる作品ではなくて、少しノイズが走った作品を作りたいですね。



「山の振動 Oscillating mountain」2014年 Photo by Yuu Kawakami © art award tokyo marunouchi 2014

【アートアワードトーキョー丸の内】…若手アーティストの発掘・育成を目的とした現代美術の展覧会。全国の主要美大卒業制作展から次代を担う新人作家を選抜し、東京駅前の「行幸地下ギャラリー」にて作品展示。公開審査を経て受賞作品が決定される。

協力：東山アーティスト・プレースメント・サービス(HAPS)…「若手芸術家等の居住・制作・発表の場づくり」を主な目的として活動する非営利組織。元新道小学校の教室をアーティストの制作室として活用するHAPSスタジオを運営。



▽ 在学生インタビュー

宝塚ベガ音楽コンクール 優勝

やました りょう
山下 諒

音楽研究科 修士課程
器楽専攻(ピアノ) 2 年生

—— 優勝おめでとうござい
ます。当日は緊張しましたが。

コンクール全体を通して
演奏した曲は、以前に一度取
り組んだ曲だったこともあつ
て、自信を持って臨めました。
本番までに自分がどれだけそ
の曲を練習してきたか、そこ
に自信を持てれば、良い緊張
感の中で演奏することができ
ると思っています。

—— 同じ曲でも以前と今回
とでは演奏する上で違う部分
はありましたか。

以前とは違う新たな解釈
を発見できたり、その時より
技術が向上したことにより新
たな表現をすることができ
て思っています。

—— 演奏を終えた直後、手
応えはありましたか。

百点満点でいうと70点ぐ
らいの手応えしかなく、「こ
れだけ練習してきた曲で、ま
だこれだけミスをするか。」

と思いました。それでも演奏
終了後のお客さんの反応が良
かったので、「案外良かった
のかな。」と思いました。

—— コンクールには積極的
に応募しているのですか。

コンクールは、短い演奏
時間の中で限られた曲を演奏
するため、そればかりではレ
パートリーが増えません。コ
ンクールで賞を取ることも大
事ですが、多くの作曲家の
曲に触れ、レパートリーを増
やしていくことの方が演奏家
としては大事だと思っています
。指導していただいている
イリーナ・メジューエワ先生
からも、「コンクールに参加
するより、リサイタルを開く
方が良い経験になる。」と言
われます。リサイタルをする
には、約90分演奏できるだけ
のレパートリーが必要です。
また、クラシック音楽に詳し
い方からそうでない方まで
様々な方が聴きに來られると
いうことを意識して、全体の
曲構成を考えなくてはなりま
せん。自分の好きな曲だけや
れば良いという訳にはいかな
いんです。そういった視点で
様々な曲と向き合うのは非常
に良い経験です。ただ、クラ
シック音楽は、陸上競技のよ
うに結果が数値で明確に表れ
るものとは異なり、曖昧なも
のなので、自分がこれまで取
り組んできたことに対して審
査を受け、評価されるとい
う経験も大切なことです。そ
のため、コンクールには、リサ

イタルで演奏する予定の曲が
課題曲とされているものや、
自由にプログラムを組めるも
のに参加するようにしていま
す。

—— 今、力を入れて取り組
んでいることは何ですか。

1月に行われる修士課程
の修了試験です。大学構内の
講堂で、ソロリサイタルの形
式で行われるのですが、約80
分ほぼ休憩なく演奏します。
休憩を取らずにこれほど長時
間演奏する機会はありません。
そのため、集中力や表
現力だけでなく、集中力や精
神力も必要となります。今は
それに向けて必死で練習して
います。

—— 学外での演奏活動は。

専攻を問わず、同級生や
先輩・後輩等が参加するコン
クールやリサイタルに、伴奏
として出演することが多いです。
多い時は週1回以上、平
均でも月2〜3回あります。
伴奏は、主役の出来に影響す
るといふ緊張感があり、ソロ
とは違う技術も必要となるた
め、良い勉強になります。

—— 今後のリサイタル等の
予定はありますか。

平成27年2月20日に同コ
ンクールの優勝記念リサイタ
ルが宝塚ベガホールで開催さ
れます。優勝の名に恥じない
ようしっかりと演奏したいと
思います。

—— 今後の目標は。

演奏家として活動してい
きたいです。そのために、大

学卒業後、まずは海外に留学
し、経験を積みたいと思っ
ています。また、将来的には、
京都芸大をはじめとする音楽
系の大学若しくは高校の教員
となり、ピアノを指導する立
場になりたいと思っています
。この大学で学んだこと、
演奏家として活動する中で経
験したことなどを後輩に伝え
ていきたいです。

1991年生まれ。京都府出身。5歳よりピアノを始める。
第62回全日本学生音楽コンクール大阪大会第2位。第11回 ショパン
国際ピアノコンクール in ASIA アジア大会、銀賞受賞。第26回 宝塚ベ
ガ音楽コンクール第1位。ならびに兵庫県知事賞受賞。その他、数多くの
賞を受賞。

秋山和慶指揮、とくしま国民文化祭記念管弦楽団と協演。

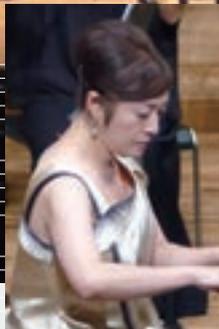
これまでに辻田裕子、松井和代、岡原慎也、坂井千春、イリーナ・メジュー
エワの各氏に師事。

大学在学中、定期演奏会、ピアノフェスティバル、学内リサイタルに出演。
京都市立音楽高等学校(現京都市立京都堀川音楽高等学校)を卒業後、
京都市立芸術大学音楽学部を経て、現在、同大学院音楽研究科修士
課程に在学中。





イリーナ・メジャーエワ 講師



野原みどり 准教授



上野 真 准教授



砂原 悟 准教授



阿部裕之 教授

ベートーヴェン ピアノ協奏曲 全曲演奏会

国内外でソリストとして活躍中の教授陣，在学生・卒業生・教員による特別編成のオーケストラ，音楽を知り尽くした教授によるプレトークなど，オール京芸のスペシャルプログラム。

▽ 教員の活動



指揮：粟辻 聡
(指揮専攻卒業生)



プレトーク (22日)：大嶋義実
(教授/音楽学部長)



プレトーク (29日)：山本 毅
(教授/音楽研究科長)

ベートーヴェンのピアノ協奏曲全5曲を、本学が誇る5名のピアノ専攻専任教員が各々演奏するリレーコンサートを、京都府立府民ホールアルティで平成26年11月22日と29日の2日間に亘って開催しました。このコンサートは本学とアルティとの共同プロジェクトとして開催されたもので、2日間で延べ876名の方にご来場いただき、増席するほどの大盛況でした。当日は、大嶋音楽学部長と山本音楽研究科長による軽妙洒脱かつ音楽の知識に富んだプレトークに始まり、そして、本番は、卒業生の粟辻聡指揮の下、ソリストの卓越した技術と音楽性にオーケストラが一体となって寄り添い、緊密な演奏を展開し、客席の興奮を高めました。終演後は、鳴り止まぬ拍手とブラボーの嵐の中、幕を閉じました。

▽演奏会を終えて
本学部の教員は、各々が演奏家としても著名な方ですが、これまで「京芸の教員」として、大学の教育研究の方針や成果を発信する機会はありませんでした。重要な芸術資源である教員の演奏会を開催することで、どのような教員の下にどのような教育研究活動を行っているのか、その成果を発信していくことは重要なことであり、今後もシリーズ化していきたいと思っております。
「大嶋義実 教授/音楽学部長」

▽協奏曲をやるとなれば当然オーケストラが必要となります。そこで在学生だけでなく、卒業生・教員を加えてオーケストラを編成しました。メンバーは皆それぞれ多忙なスケジュールを割いて率先して参加してくれ、中にはこのために海外から帰国し、参加してくれた卒業生もいました。「京芸のために」と快く協力してくれたことは大変ありがたいことであるとともに、メンバーそれぞれが相互に良い刺激を受け、貴重な経験となりました。「山本毅 教授/音楽研究科長」

Program

—11月22日—

歌劇「フィデリオ」序曲 Op.72c

♪ピアノ協奏曲 第1番ハ長調 Op.15

上野真

♪ピアノ協奏曲 第2番変ロ長調 Op.19

イリーナ・メジャーエワ

♪ピアノ協奏曲 第3番ハ短調 Op.37

阿部裕之

—11月29日—

劇音楽「エグモント」序曲 Op.84

♪ピアノ協奏曲 第4番ト長調 Op.58

砂原悟

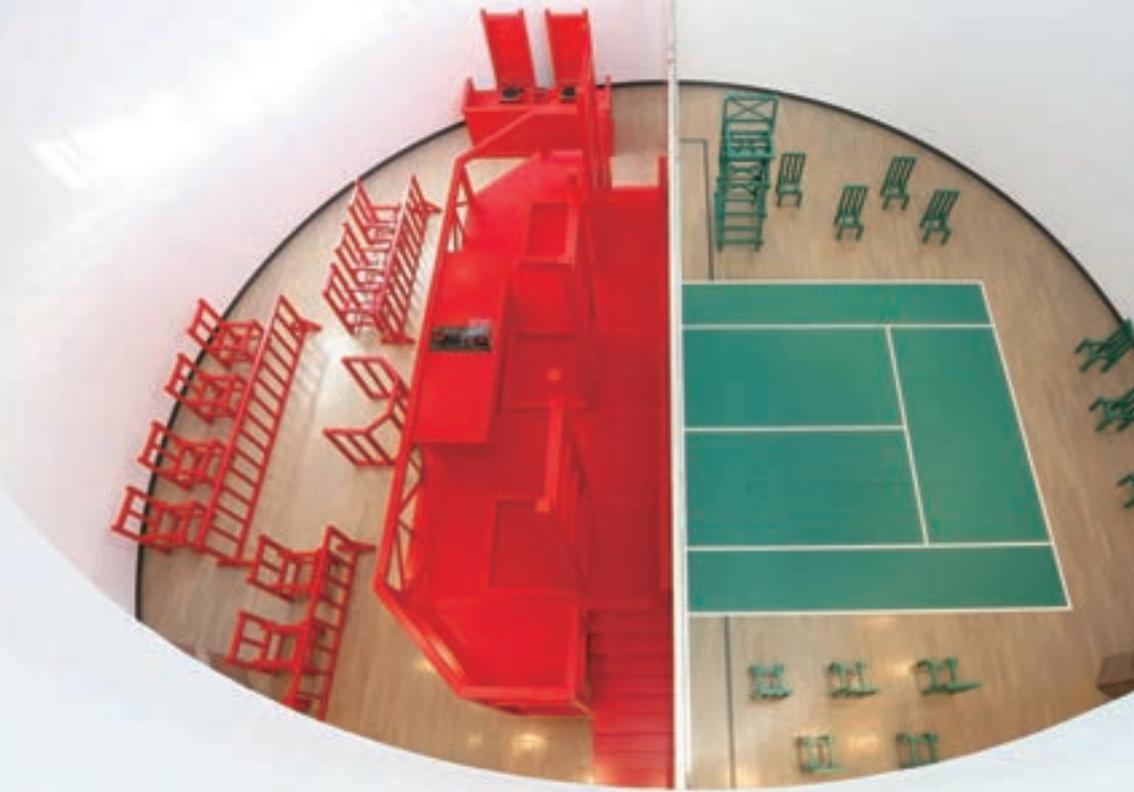
♪ピアノ協奏曲 第5番変ホ長調 Op.73「皇帝」

野原みどり



美術学部 構想設計専攻 教授
たかはし さとる
高橋 悟

芸術・医療・生命・環境に関わる研究を国内外の研究機関・美術館との連携を進めると同時に多角的な視点でアートプロジェクトを探索。



ヨ コハマトリエンナーレ2014に、林剛+中塚裕子が京都アンデパンダン展で発表した作品(1983〜85年)の位相を変え、再配置を試みる作品「法と星座 | Turn Coat/Turn Court」を出品した。高橋悟教授にお話を伺いました。

—— 林剛さん・中塚裕子さんとの関わりは。

林剛さんは、僕の学生時代のゼミの先生で、授業を受けながら、林さんのいろんな活動を身近に見ていました。林さん・中塚さんが、京都ア



撮影：来田猛

ンデパンダン展でやっていた内容は面白いものでしたが、当時のアートの流行とは異なるもので、研究としては誰も整理出来ていなかったもので、ずっとそれを整理したいと思っていました。

—— 二つの整理として出品された今回の作品でのこだわりは。

まず、ヨコハマトリエンナーレは、お子さんからお年寄りまで、一般の方から世界トップレベルの専門家まで来られる、幅の広いものなので、作品は何の説明もなく楽しめるものという点を大事にしました。

コンセプトの部分では、学芸員や美術史家とは別のアプローチで、京都アンデパンダン展でのプロジェクトが持っていたルールなどは尊重しながらそれを別の文脈に生かすという可能性を探り、組み立てていきました。

また、作品が展覧会全体の中で負う役割については、アーティスティックディレクターを担当された森村泰昌さんにかなりお話を聞いていたんですけど、見ている方向が全然違つていました。でも違いは違いで良いだろうと。全体の中でポコッと穴が開いたような異質な空間を作れば、展覧会の中に別の機能を持たせることができると思えました。

タイトルも言葉や視覚などいろんなレベルで遊んでいて、森村さんに言わなかったんですけど、「Turn Coat」は「裏切り」という意味があった、最初に「裏切りますよ」と宣言しているんです。それは、林さん・中塚さんに対しての裏切りでもあるという事なんです。

僕は、作家と作品の関係において、一番最初に裏切られるのは作家だと思っています。自分で作ったものを世に

出した瞬間に作り手が裏切られるという事でないかと作品を作る意味がなくて、その事で自分が変わる経験が面白いと思うんですよ。それを他者と共有できたら良いかなという意味もあります。

—— 今後の展開は。

京都国際現代芸術祭に今回の作品を組み込む予定です。話は繋がっていて、ヨコハマの続きがあるんです。けど、このままでは出さない。同じようなものを使いながら、みんなが見たイメージとはがらつと変わるもの、かつ、京都、岡崎、崇仁という場所も関係するものとして組み込みたいですね。

予告

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭 2015 関連展
「still moving」

2015年3月7日(土)～5月10日(日)

元崇仁小学校/ギャラリーアクア内「@KCUA 1」にて

*詳細が決まり次第、大学ホームページでお知らせします。



浮世絵を読み解く—ときわづぶし 常磐津節の明治維新—

たけうち ゆういち

日本伝統音楽研究センター准教授(常磐津 わかねだゆう 若音太夫) 竹内 有一

私の研究室にある浮世絵(版画)をクイズにしてみました。上の図版をご覧ください(原本をご覧になりたい方は京都芸大新研究棟805室へどうぞ)。舞台上では常磐津節(浄瑠璃の一種)の代表曲「積恋雪関扉」が演じられています。さて、描かれた10人の中で仲間はずれは誰でしょうか?

まずは、左から3人目(黒い羽織)に注目。不思議な存在です。演奏や演技をしているように見えません。彼は後見といって、非番の若手演奏者です。描かれているような見台(注)や湯呑みを運び、万が一のときは代演をする、といった役目があると考えられます。現代の歌舞伎公演でも同様です。私も演奏家になりたての頃、歌舞伎座でしばしば後見をつとめました。謎がひとつ。後見役の役者(右下、蠟燭をかざす人)とは違い、演奏者の後見は、観客からはみえない場所に控えているはずですが、この絵のように、後見が公演中に舞台上に出てくるのがあったのか、あるいは、絵師が客席からは見えないはずの後見をクローズアップして敢えて描いたのか。考察の余地が残ります。いずれにしても、人々が役者だけでなく、常磐津の演奏者に対して高い関心を寄せていたこと、さらにはデビュー間もない若手に対しても並ならぬ興味を抱いていたこと

を、この絵は物語っています。ところで、クイズの正解は、この後見役ではなく、左上の枠(松皮菱紋)に囲まれた人でした。すでに死んでいた人だからです。手を隠しているからなのか、そんな雰囲気はしませんか。ではなぜ故人が描かれているのでしょうか? 短冊をみてください。この人は常磐津豊後大掾(前名:4世文字太夫)といって、幕末期の常磐津節を盛り立てた第一人者でした。扇子を手にした中央の演奏者は6世常磐津小文字太夫。二人は親子でした。

第40回公開講座のご案内

平成27年2月2日(月)午後
京都芸術センター(中京区)にて

常磐津節の魅力と伝承を見据える座談会と、名曲「新荷雪間の市川」(通称:山姥)の演奏があります。慈しみ深い山姥に育てられた無邪気な坂田金時(金太郎)が武将としてスカウトされるまでを描いた作品で、竹内准教授が金時役で出演します。常磐津らしい幅広い表現力を屈指する浄瑠璃と、物語の進行と情景を盛り立てる優れた作曲の三味線をご堪能ください。重要無形文化財の保持団体である常磐津節保存会の協力。

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター(通称:でんおん)では、日本の伝統音楽や芸能についての研究成果を様々な形で発信し、多くの方に理解を深めていただけるよう、どなたでもご参加いただける講座やセミナーなどを定期的で開催しています。

常磐津節は、歌舞伎の市川團十郎家と同様に、江戸っ子の矜持とされたものの一つでした。しかし、当時の常磐津家元では、豊後大掾の後継者が短期間に二代続いて離縁され、リーダーの擁立に苦心。そんな中に台頭したのが6世小文字太夫でした。常磐津節の新たな逸材への熱い声援が、この一枚の絵から聞こえてくるではありませんか。

この興行の初日は、慶応4年8月29日。明治に改元されたのは9月8日。まさに、この興行中に明治維新を迎えた。世の変動に直面し新しいものを歓迎し摂取する機運、一方では、江戸の文化と太平を懐古し維持したい気分。明治期の歌舞伎とその音楽は、両方の要素が入り交じって展開していきます。それは、この絵にも見え隠れ

注:「見台」とは、台本(浄瑠璃本)を見るために使用する台のこと。常磐津では「たこ足」と俗称される3本脚がトレードマーク。

日本伝統音楽研究センター図書室 (本学内 新研究棟6階)

日本の音楽・芸能に関する一般書籍・古文書・楽譜・録音映像資料・楽器等を収集する専門図書室も備えています。専門スタッフがお手伝いするレファレンスサービスもあり、どなたでも閲覧可能です。是非お越しください。<http://w3.kcuu.ac.jp/jtm/>
開室日時:水・木・金曜日 10:00-12:00, 13:00-17:00

平成26年4月、芸術資源研究センター（英語表記 Archival Research Center）が発足しました。アーカイブの手法を活用することによって、本学や京都に受け継がれ、日々新たに誕生する芸術作品や各種資料を「芸術資源」として包括的に捉え直し、新たな芸術創造につなげることを目的とした調査・研究機関で、美術学部、音楽学部、日本伝統音楽研究センター、附属図書館、芸術資料館という五つの学内機関を横断的につなぐプラットフォームの役割も担います。

芸術資源研究センター、始動！

当センターでは、アーカイブ理論の研究、資料体の調査収集と活用、アーカイブの教育の場での活用という基礎的研究に加えて、「オーラルヒストリー」「記譜プロジェクト」「富本憲吉アーカイブ・辻本勇コレクション」「森村泰昌アーカイブ」「総合基礎演技アーカイブ」という五つの重点研究を推進しています。そして、これらの成果を生かしたシンポジウムを主催するほか、他機関等との共催事業や学内外に向けたアーカイブについての研究会にも積極的に取り組んでいるところでです。

7月に開催した芸術資源研究センター開設記念シンポジウムでは、「舞と謡の過去・現在・未来―記譜法と身体伝承―」と題したワークショップ等を実施しました。（写真1、2）
8月には、ギャラリー@KCUA（アークア）において第2回アーカイブ研究会を開催しました。ニューヨーク近代美術館で長年キュレーターを務めたバーバラ・ロンドン氏が自らの経験に基づき語る70年代から今日までのビデオ・アートの歴史は、刺激的で多くの来場者の関心を集めました。（写真3、4）

大学と美術館の役割」を開催しました。アーカイブの活用や研究に携わる専門家の活発な意見交換があり、本学の「芸術資源研究センター」誕生の意義にも迫る内容となりました。
芸術資源研究センターでは今後もこのようなシンポジウムや研究会、学内外の組織との共催事業を重ね、成果を本学の教育や研究に活かすことはもとより、学内外の研究者や市民の皆様とも連携し、新たな創造に向けた智の輪を大きく広げていきたいと考えています。



平成26年度上半期 芸術資源研究センター実施の主な事業

- 5/30 研修会「芸術文化と著作権」
【講師：福井健策（弁護士）】
- 6/25 第1回アーカイブ研究会
【講師：佐藤守弘（京都精華大学教授）】
- 7/1 センター開設記念シンポジウム
【パネリスト：金剛龍謹（能楽師）、本学教員】
- 7/1 センター開設記念講演会
【講師：鷲田清一（大谷大学教授）】
- 7/7 特別授業
【講師：森村泰昌（本学客員教授）】
- 8/2 第2回アーカイブ研究会
【講師：バーバラ・ロンドン（キュレーター）】
- 9/30 第3回アーカイブ研究会
【講師：平芳幸浩（京都工芸繊維大学准教授）】

芸術資源研究センター
准教授

かじやけんじ
加治屋 健司

匿名の多数による 情報のアーカイブ

最近、戦後まもない広島で出版された写真集のことを調べていた。『LIVING HIROSHIMA』と題された一九四九年出版の写真集で、原爆のキノコ雲、戦後直後の爆心地、復興の様子などの写真を収めている。当時は連合国軍占領下で原爆報道が規制されていたにもかかわらず、なぜか出版できたようだ。撮影には木村伊兵衛が参加しており、写真史的にも重要であるが、九年後に出版された土門拳の『コロソム』（一九五八

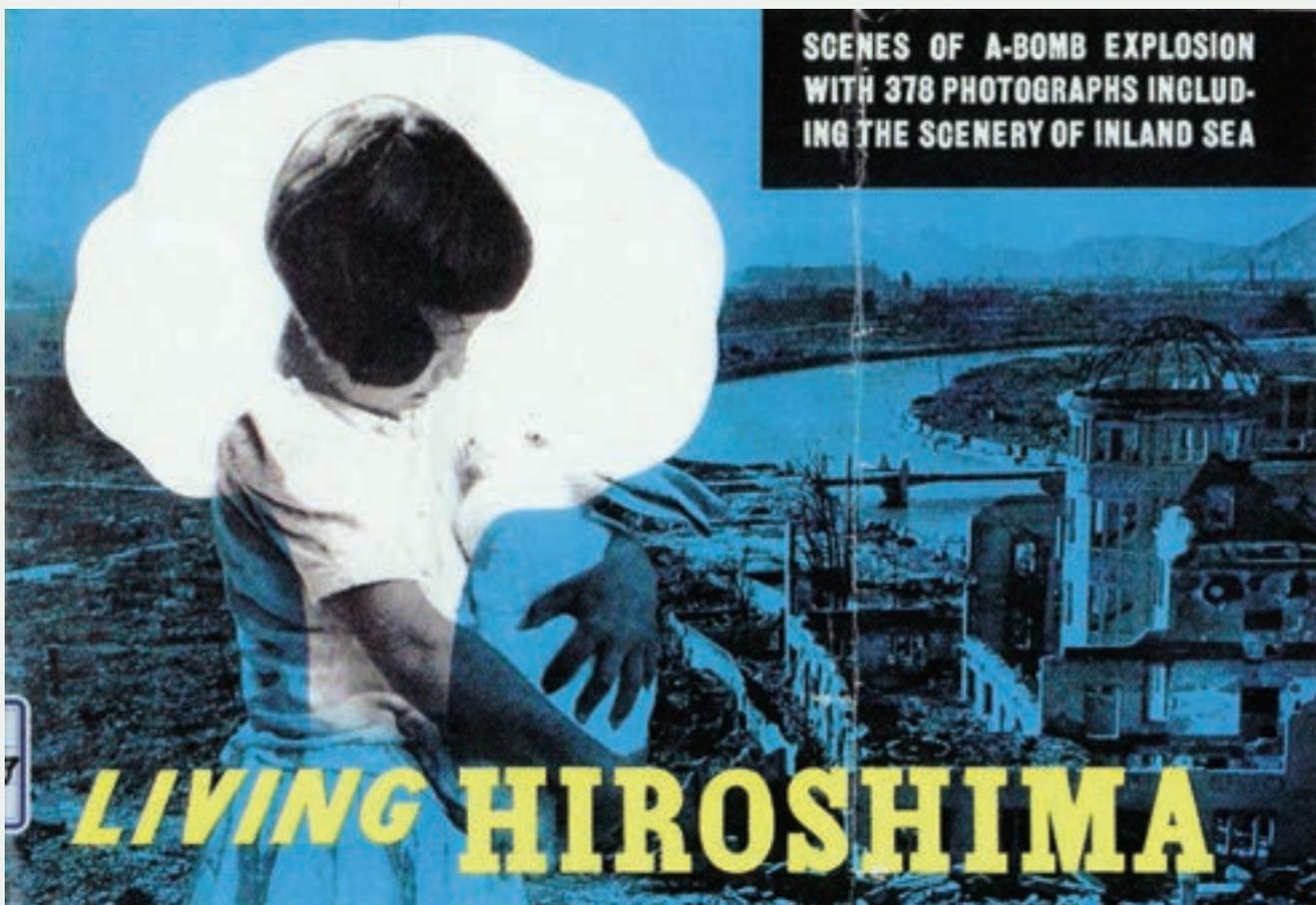
年）が注目を集める一方で、この写真集は長らく忘れられた存在となっていた。

興味深いのは、この写真集が広島県観光協会によって刊行されたことである。序文や説明が全て英語であり、原爆被害の写真だけでなく、瀬戸内海の島々など県の名所の写真も多数載せていることを考えると、これは原爆記録写真集であると同時に、海外向けの観光案内書でもあったことが分かる。原爆で被害を受けた広島は急速に世界的な知名度を獲得するが、広島の人々やその人々がそれを逆手にとって、国際観光地としての広島を売り込んでいこうとする姿勢に興味をもった。

観光の視点から広島復興を論じた当時の議論を探るために、国立国会図書館や広島県図書館や公文書館で調査した。公文書館に寄贈された個人コレクションや、GHQ/SCAPが検閲した文書を集めたプランゲ文庫には大いに助けられたが、もはや所在不明の文書があることも知った。現在残っている資料から当時の議論を再構成して、一〇月一〇日に森美術館とテート・アジア太平洋洋リサーチセンター共催のシンポジウム「トラウマとユートピア：戦後から現代におけるアジア美術の相互影響関係」で発表し、大幅に書き直して『photographers gallery press』 11号（特

集・爆心地の写真一九四五―一九五二）に寄稿した。

こうした調査をしていて感じるのは、資料の保存は、その意志を強く持つ個人によって行われてきたということである。もちろん現在では、公文書館法や公文書管理法によって、行政文書は保存の方向に向かっているし、美術に関して言えば、美術館や研究機関が、作家やギャラリスト、コレクター等の資料を引き受けつつある。だが、インターネットとパソコンが普及し、個人が扱う情報の大容量化が進む今日、一般の人々が大量の情報を集めやすくなっている。昨年アメリカで、ある個人が三五年間ポストンとフィラデルフィアで録画し続けたニュースを収めた一四万本のビデオテープがインターネット・アーカイブに寄贈されたことが話題となったが、現在の情報環境では、特異なコレクターでなくても、同様の行為は不可能ではないだろう。こうした個人が集めた資料やデータの保存がこれから重要な問題になっていくのではないだろうか。アーカイブがアーティストの関心の対象となっている現在、それらが研究と同時に創造のためのマテリアルであることは言うまでもない。匿名の多数によって集積された情報のアーカイブに対して、私たちはどのようにアプローチすることができようか。



『LIVING HIROSHIMA』（広島県観光協会・1949年）の表紙（広島県立図書館蔵）

京都市が本学の崇仁地域への移転整備方針の決定を発表

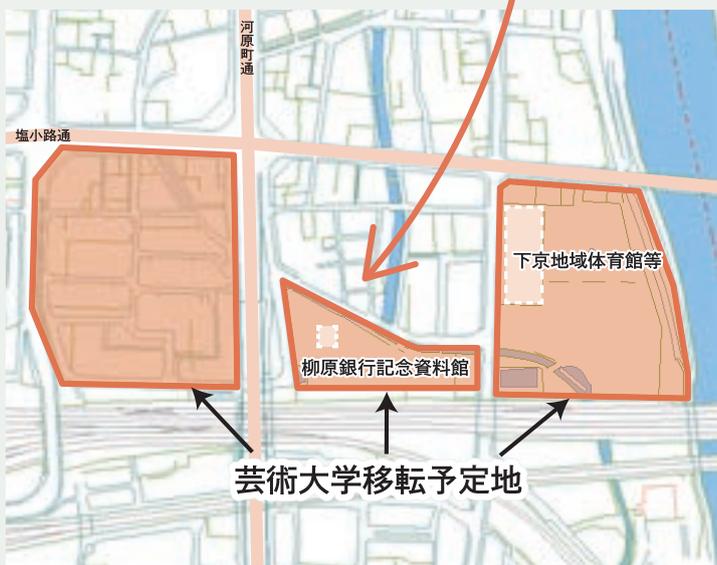
京都芸大は、現在地（西京区大枝沓掛町）に移転してから30余年が経過し、施設に、様々な課題を抱えています。これらの課題を解消し、本学が京都のまちとともに発展していくことを目指し、平成25年3月28日、建昌哲理事長から門川大作京都市長に対して、JRR京都駅東側の崇仁地域へ本学を移転・整備すること等を要望しました。その後、京都市において、様々な角度から検討が行われ、平成

26年1月6日に、門川市長が、本学を崇仁地域に移転整備する方針を決定したことを発表されました。京都市からは、移転先である崇仁地域のまちづくりの進捗状況を踏まえると、新キャンパスの移転完成には今後10年程度はかかるとの見込みが示され、平成26年度中に移転整備に係る基本構想が策定される予定です。

※移転予定地の詳細は左図を参照



拡大図



韓国芸術総合学校と交流協定を締結

京都芸大では、近年目覚ましい成長を遂げるアジア地域の芸術大学との交流連携の充実に向けた取組を進めており、その一環として、11月20日、韓国を代表する国立芸術大学「韓国芸術総合学校」と、両校の交換留学、教員の派遣、共同プロジェクト実施等の交流協定を締結しました。

また、同協定に基づき、金奉烈（キムボンニョク）学校長を本学客員教授としてお招きし、11月21日、本学において、韓国の伝統建築に関する特別授業を実施しました。



金奉烈学校長の特別授業

本学の次期理事長予定者に鷺田清一氏を選出

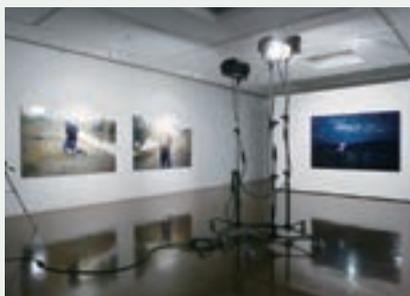
建昌哲理事長が平成27年3月31日をもって辞任することに伴い、理事長選考会議において鷺田清一氏（前大阪大総長、哲学者）を次期理事長予定者に選出しました。任期は、平成27年4月1日から4年間で、京都市立芸術大学学長を兼ねます。



次期理事長予定者の鷺田清一氏

アピチャツポン・ウィーラセタクン氏が国内最大規模の個展をギャラリー@KCUAで開催

6月14日から7月27日まで、ギャラリー@KCUAにおいて、映画監督として、カンヌ国際映画祭、パルムドール（最高賞）を受賞し、現代美術作家としても世界的に評価の高いアピチャツポン・ウィーラセタクン氏の国内最大規模の個展「PHOTOPHOBIA」を開催し、映像作品を中心に、写真等の平面作品を含む約40点を展示しました。



「PHOTOPHOBIA」展示風景（ギャラリー@KCUAにて）

編集後記

第18号では、地域連携の取組を特集しました。創立から130余年にわたり、様々な活動を展開し、公立の総合芸術大学として着実な発展を遂げることができたのは、西京区の皆様をはじめ市民の皆様のおかげであることを今回の編集を通じて改めて感じました。これから先も地域連携の取組を継続し、「市民に愛され、誇りに思っただけの大学」として京都のまちとともに発展していきたいと考えております。

京都市立芸術大学
全学広報委員会一同

祇園祭にて大船鉾の裾幕や衣装の制作など美術学部が活躍

平成26年夏、一五〇年ぶりに祇園祭の山鉾巡行に復帰した大船鉾の裾幕、音頭取りの衣装の制作に、本学教員と学生が携わらせていただきました。この取組は、美術学部の専攻横断的な授業である「テーマ演習」において実施したものです。

式で、建畠哲理事長から大船鉾保存会の松居米三理事長に裾幕を進呈しました。7月20日に行われた大船鉾の曳き初めで披露され、詰めかけた大勢の市民や観光客を魅了しました。

また、株式会社読売連合広告社からの依頼を受け、学生がデザインしたうちわが、祇園祭の期間中に配布されました。

京都市交響楽団常任指揮者である広上淳一客員教授が、6月から7月までの約2週間にわたり、音楽学部・大学院オーケストラを指導しました。その成果を、6月29日に京都コンサートホールで開催した「京都ライオンズクラブ創立60周年記念チャリティコンサート」で、7月3日に大阪市のザ・シンフォニーホールで東京音楽大学との共催により開催した「東京音楽大学&京都市立芸術大学 吹奏楽交流演奏会」において披露し、多くの方に御来場いただきました。

広上淳一客員教授が本学オーケストラを指導



美術学部生が制作した衣装を着た音頭取り



建畠哲理事長が、大船鉾保存会理事長の松居米三氏に目録を進呈



寛野真規子さん(美術学部油画専攻4回生) デザインの手ぬぐい



西澤和樹さん(美術学部デザイン科2回生) デザインのうちわ

京都芸大を御支援くださるみなさまへ



京都芸大の教育研究等の充実を図るため、「京芸友の会」制度による御寄付をお願い申し上げます。「教育研究活動への助成」「大学主催の展覧会、演奏会、公開講座等への助成」などから寄付の用途を選んでいただき、皆様の御意向をふまえて活用します。御寄付をいただいた方は、手続きを行うことで税控除や損金算入の措置が受けられる場合があります。また、一定の金額以上の御支援をいただいた方には本学からのオリジナル特典がございます。詳細は、大学ホームページを御覧ください。

問合せ 京芸友の会担当 電話：075-334-2200

御寄付をいただきました皆様への感謝の意を込め、お名前を掲載させていただきます。

西尾商事有限会社 代表取締役 西尾太志 様

京都市立芸術大学美術学部同窓会「象の会」会長 上村淳之 様

個人の皆様からも、多数の御寄付を頂戴しております。ありがとうございました。

※ 2014年1月から11月末までに御寄付をいただいた皆様のうち、公表を希望された法人・団体等の方のみ記載



学生を指導する広上淳一客員教授